

第五章

交わりの基本と神と共にあることの豊かな実

「もし神の光のうちにいますごとく光のうちに歩まば、我ら互にまじはりを得、またその子イエスの血、すべての罪より我らを潔む」

(ヨハネ第一書1章7節)

●教師の皆様、ここにこの授業のあなたの目的があります。

- 1.あなたの最初の目的は、「関係」と「交わり」の違いを示すことです。
- 2.あなたの第二の目的は、神との交わりが生活の質のためには大切であり、神はその子等の一人一人にそれを望んでおられる、という点を示すことです。
- 3.この授業のもう一つの目的は、おこないが信徒の神との交わりに、直接関係がある点を示すことです。
- 4.この授業の非常に大切な目的は、あなたの生徒に、神との交わりに留まる方法を示すことです。
- 5.この授業のさらに別の目的は、あなたの生徒に、生徒が行なう主の業はたとえ何であっても、愛がその唯一の動機であるべきである、という点を確信させることです。

●主題、意図、適用

主題

「交わりの基本と神と共にあることの豊かな実」

意図

一度人が救われたからには、神と交わりを持ちながら歩くのがどんな事かを学ぶ必要があります。

適用

関係と交わりを区別し、あなたの生徒に、どうして交わりが失われ、また回復するかを教えなさい。それから生徒に、すべてのクリスチャンの奉仕の動機を教えなさい。

●第五課の提示

いつでもおさらいをすることを覚えて下さい。ここではおさらいは特に大切でしょう。
<84>

先週はあなたの生徒が神のみ前において、その霊的な状態に直面し、おそらくイエス・キリストを自己の救い主として信頼した時です。生徒はこの時点で疑問やあいまいさを抱いているかもしれません。そこでおさらいにより、あなたが生徒の為に、見極め、確かめてあげる事ができるのです。私はこのおさらいの大半を第四課の諸々の視点に手を加えることで費やします。この学びでは、私たちは神のなさねるやり方で物事を見ているのだということ、それは即ち聖書を通してである訳ですが、そのことを生徒に思い出させるのに、ほんの僅かな時間で済みます。ここでの大きな挑戦はグループ1からグループ2への到達の方法にある、という短い解説をします。人が自分で1を抜け出し、2に到達するのは不可能です。しかし神なら、イエス・キリストのご人格とみわざを通し、どんな人でも失せた状態から救われた状態へと変えることができになります。神はいかなる個人であっても、その人がイエス・キリストを信じるその瞬間に、この変化を起こされます。信じることは信頼することです。そしてキリストへの信頼が生じた瞬間に、失せた人は新たに生まれ、神の家族に加わります。それには他の方法はありません。そして一度加わったら、人は抜け出せません。

教師の皆様、あなたは自分の生徒に、この授業では方向を変えようとしていることを告げるべきです。最初の四つの授業を通して、あなたは神の家族に入る方法、救われる方法について語ってきました。今あなたは、救われた後人がすることを討議し始めるのです。あなたがここや最後の授業で扱うことは、人が救われているかどうか、天国へ向かっているかどうかには関係ありません。人が赤ちゃんを得ることと、赤ちゃんを育てて成熟させることとは、全く異なる事柄です。ですから第五課と第六課では、既にキリストにある赤子がすべきことを論じます。彼らがどう生き、どう行動するかということです。私たちはこれらの授業では、人がキリストにある、新しく生まれた赤子となる為に、何が必要かということとは扱いません。それはあなたの生徒が納得する為に大切な事柄です。さもないとあなたが生徒に救われる為に何かをするよう、今から教えようとしているのではないかと誤解するかもしれないからです。生徒が既に救われているのが解っているか、確かめなさい。そうすれば、生徒がよきにせよ、あしきにせよ、別な事をしようとしても、それには関係なく、その道に留まります。しかし神は立派な親と同じように、ただ新しく生まれてその家族に加わり、成長もなく幼児の状態ですそこに留まるだけ、ということには関心を

持たれません。違うのです。神はその新しく生まれた赤子に、成熟し、神のみわざにおいて実を豊かに結ぶよう望んでおられるのです。ですからあなたが今提示しようとする素材は、既に救われた者の為（ため）に企画されているものです。人々を救う為（ため）の物ではありません。

「ですからあなたの生徒に、あなたがこれから神との「交わり」を論じ始める事を語って下さい。それは神との「関係」とはかなり違うものです。

A「交わり」を説明し、またそれが「関係」とはどれ程異なるかを説明しなさい。

1 既に示してあるように、図に「交わり」と書き、「ヨハネ1」を入れなさい。交わりとは、同意、一致、調和であることを説明しなさい。

2 「交わり」を、親族関係、血統、家系、血のつながりを語る「関係」と対比させなさい。人は関係を持たない人々と交わりを持つかもしれない、という点を指摘しなさい。交わりは関係よりも、全く異なる人生の局面を語っています。

3 関係がただ誕生によって確立され、作用するのに対し（この時点で、図に「誕生」と書き、既に示したように「関係」と結びなさい。）神との交わりは、最初新生によって確立されるものとはいえ、人の「おこない」による影響を受けることを指摘しなさい。（この時点で、図に「おこない」と書き、既に示してあるように繋げなさい。）ですから、あなたの生徒におこないがクリスチャンには大切であることを教えなさい。それは非常に大切で、常に「よきもの」であるべきです。しかしそれは救いの為でなく、人が既に救われている故のものです。おこないは関係に少しも影響を及ぼしません。それは交わりに強く影響を及ぼします。

ここで例を示して下さい。

家族の対比を使いなさい。良いあるいは悪いおこないが、家族の一員のその家族に対する関係に、全く何一つ影響を与えないことは、誰もが知っています。しかしおこないが、人のその家族との交わりに非常に大きな影響を及ぼすことも、誰もが知っていることです。肉の家族にある人ならほとんど、関係と交わりを分けるのに何の困難も持たないように見えます。しかし霊の領域では、一群の人々がいつも、その二つを混同させ、それらをいっしょくたにしようとしています。ここでの混乱は、非常に多くの人々が、良いおこないとわざは救いへの道である、と考えている点です。彼らはおこないが関係と交わりあると考えるのです。そうではありません。

それは交わりとのみ関係があるのです。肉と霊の家族の対比をよく見てみれば、誰でもものわりのよい人にその真理を伝えられるでしょう。

B あなたの生徒に、神はその子等に、いつもご自身とのよき交わりを楽しむよう望んでおられる、ということを説明しなさい。

1 ヨハネ第一書1章は、神が使徒ヨハネを用いて交わりを求めておられる、すぐれた章節です。特に3節に注意しなさい。

2 どの親でも、神がいかにその子等と交わりを持ちたがっておられるか、容易に理解できます。神は光であられ、また正しいのです。神の子等が神と交わりをもちながら歩む時、彼らは祝されます。神はその子等が御自身から離れ、不敬けんな生活に入ってゆくのを望まれません。そこではルカ伝15章の放蕩息子で立証されているように、彼らが困難に陥り霊的に貧しくなることを、神は知っておられるのです。神はその子等が自己の生活において霊的な特質と繁栄を享受することを望んでおられます。それは彼らが義と真理のうちにあつて、神との交わりを持っている時のみ可能です。イエスはヨハネ10：10で「わが来るは羊にいのちを得しめ、かつ豊に得しめん為なり」と言われました。（ヨハネ10：10を図に加えなさい）神はあなたを神の家族に加えながら、ただ倒してしまうというような事に興味を持っておられません。あなたの生活における特質を望んでおられますから、交わりを求めておられるのです。こうして神はコロサイ2：6（図に加えなさい）で、私たちに神と共に歩む事を命じておられます。

C 次にあなたの生徒に、悪いおこないは、信徒の神との交わりに直接不利な関係があることを教えて下さい。

1 罪は神との交わりを解消します。既に示したように、図に「罪」を加えて下さい。またイザヤ59：1-2を加え、あなたがその章節を読むか引用する時、あなたの生徒にそこを開けさせなさい。罪は神との関係を解消する事はできないけれども、交わりを解消し、大いなる苦しきをもたらず事はできる、と説明して下さい。あなたは自分の生徒に、エレミヤ5：25を指摘したいと思うかもしれません。

2 罪が私たちすべてにとって、人生の現実であり、信徒も含まれますから（Iヨハネ1：8，10）あらゆる信徒が、神との妨げのない交わりを続けることは、最初簡<87>

単なようでも、実はそうではない、ということをつかむようになるでしょう。

教師の皆様、あなたの生徒に、罪を犯し、神との交わりが妨げられ、前と違って気持ちのよいものでないことがわかったとしても、ひどく驚いたり、自分自身を憎んだりすることのないように忠告しなさい。神との交わりから外れることは、「後退すること」と呼ばれています。そしてそれは私たちの生活における罪の故に生じるのです。また罪は私たちが戦わねばならない人生の現実でもあります。

Ⅱ さてあなたの生徒に、神はその子等を愛しておられ、一度そのうちの一人がご自身との交わりから外れてしまった時は、その子をご自身との交わりに戻す為、迅速な行動をとられる、ということをおしえて下さい。

A 神がなされるその方法は、その子の生活の中に「懲罰」を導入することです。

1 図に「懲罰」と書いて、ヘブル12:5-11を挿入しなさい。

2 この章節では三つの段階の懲罰に触れています。まず第一は「糾弾する」で、第二は「こらしめる」、第三は「鞭うつ」です。私たちが読んだり、教えや説教を聞いたりするときの神のみことばが、私たちの生活における罪について私たちに糾弾するのです。神は様々な手段を通して、それを私たちの耳に運ばれるでしょう。宣べ伝える者、友達、あるいは敵でさえ用いられます。もし私たちが神の「糾弾」を無視すれば、神の懲罰は向きを変え、もっと厳しい「こらしめ」に進みます。もし「こらしめ」が私たちがその罪から転じさせない時は、厳格な「鞭打ち」がやってきます。

3 教師の皆様、あなたは今このすべての章節を、生徒の聖書を追いながら共に読むべきです。神の子等の「すべて」が懲罰を受けるという事実を強調して下さい。6節です。また神に対して罪を犯しながら、何の懲罰をも受けたくない人は、子のふりをするにはできても子ではない、という8節も強調して下さい。(あなたの生徒に、自分を審判者としないう忠告して下さい。なぜなら神はあなたの生徒が見ることもできないようなこらしめをつかさどっておられるでしょうから) さらに、主のこらしめはいつも矯正の為であり、決して処罰の為ではないから、神の子等はそれを怒ったり、抵抗したりすべきではない、という5節と10節も強調して下さい。それはいつも子の益の為であって、決して傷つける為ではないのです。ああ、

そうです。それは傷つけるかもしれません。でも決して罪の結果ほどのものではありません。神はその懲罰をもって矯正することを求めておられるのです。そしてこの章節から、矯正と益は神が何をなさっておられるのかがわかり、罪からたちかえる人にのみ来ることを強調して下さい。11節です。うなじを硬くし、神に逆らう人々はますます悪い状態になり、遂には神が彼らを早く墓場へ運ばざるを得ないようにされるかもしれません。それは「コリント11:30」で、コリントの信徒のうちに実際あったことです。

ここで例を示して下さい。

私には二人の息子と一人の娘がいます。彼らが成長するにつれて、悪い性向が徐々に現れてくるのがわかりました。それは人生において彼らを傷つけ、荒廃させてしまうことを知りました。もし私がそうした性向をながめ、その結果を知りながらその問題を正す為になんもしなかったら、どんな父親となっていたでしょうか。確かに、あたり前の父として、私は自分の子供たちの長い幸福を気づかっています。まして私たちの天の父なら、その霊的な息子たちや娘たちのことをさらに気づかせておられるのです。

B次にあなたの生徒に、一度罪を犯し、神の懲罰が始まったら、何をすべきかを教えなさい。神にたちかえり交わりを持つ方法を教えなさい。

1生徒に、信徒が神にたちかえり、交わりを持つことのできる方法が一つだけあることを告げて下さい。信徒は神にその罪を告白しなければなりません。既に示したように、図に「告白」と書きなさい。

2さて「ヨハネ1:9」を挿入し、あなたの生徒にその節を探させなさい。教師の皆様もし生徒がこれを逃したら、そのクリスチャン生活で、決して豊かな実を結び、幸福になることはないでしょう。生徒は罪を犯します。もし生徒がそれについてどうすべきかを学ばなかったら、霊的に破船してしまうでしょう。ですから生徒がこの真理を得ているかどうかみなさい。それは効果あるクリスチャンの歩みの為には、おそらくすべての真理の中でも最も大切な事柄でしょう。

告白は真理にあって、神に対するあなたの罪を認めることである、と説明して下さい。それは中身もなく、不まじめに罪をあげることはありません。神が正しく

あなたが間違っていることを心から認めることです。

また告白は直接神に対してすべきことを説明して下さい。説教者や誰か他の人ではありません。そうです。私たちは告白を信じます。それはカトリックの人々だけのものではありません。私たちは告白しますが、人に対してではありません。神に対して告白します。

さらに一度私たちが真理にあって告白すれば、神は赦して下さい、その罪科は去ることも説明して下さい。一度神が赦されたら、あなた自身を責め続けたり、その罪をあなたの頭に持ち続けたりする必要はありません。それは去ったのです。赦され、取り消されたのです。そしてすべては、Ⅰヨハネ1：7によれば、イエス・キリストの血の力によるのです。

教師の皆様、あなたの生徒に告白することを教えて下さい。日曜毎に教会で、とか、一日の終わりにだけでなく、刻一刻、罪がその生活で生じた瞬間にです。

3次にヘブル4：14-16を図に加え、あなたが読むか引用する時、あなたの生徒にその章節をめぐらせなさい。イエス・キリストが私たちの大祭司であられ、私たちが告白事を携えてゆくべきお方であられる点を生徒に指摘して下さい。彼が私たちの来ることを歓迎しておられる点を強調して下さい。

生徒に16節から、私たちが告白をもって彼のみもとに行く時に得る二つの事を示して下さい。第一に私たちは「あわれみ」を得ます。それこそ赦しの本質です。

すなわち「あわれみ」です。私たちは罪を犯します。そして彼が赦されるのです。

私たちが罪科のうちに来る時、得るのは正当さではありません。あわれみです。

第二に私たちは「機に合ふ助となる恵」を得ます。私たちの大祭司イエスは、私たちの罪を赦されるだけでなく、次の誘惑や試練のための、特別な助けを私たちに与えて下さるのです。彼は私たちの魂の土の中、即ちまず罪が生じる場所に、助けを与えて下さいます。もし私たちがかっとなるなら、彼はそれが怒りの霊から出たものであることを知っておられます。ですから彼はそのかっとなってしまった事を赦されるだけでなく、それが生じた怒りの霊に呼び掛け、恵みあるいは霊的な薬をも与えて下さるのです。

ああそうです。イエスは私たちの幸福に関心をもっておられるのです。そして彼

の主要な助けの方法の一つは、祈りによるものです。ですからあなたの生徒に、祈る事を教えて下さい。生徒に、祈りと告白は、もしも神との交わりに留まり、幸福で美り豊かなクリスチャンになろうとするなら、毎日のものに、そしてしばしばその人生において、一日じゅうといった部分を占めるものにならなければいけない、ということをおしめて下さい。告白が交わりを回復させます。それがなければ、生徒は外に出て、交わりから外れた状態のままです。

Ⅲ さてあなたの生徒に、神が生徒に神の子としてするよう求めておられることが多くあるという点と、生徒が神のみわざをすべてなす時に、たった一つの根拠を望んでおられるという点を教えて下さい。その根拠あるいは動機は愛です。

A 生徒に、神はその子等が良き事をするのに、「そうしなければならない」という理由を望んでおられないことを説明して下さい。彼らがよき事をし、神に仕えるのに「そうしたい」からという理由を望んでおられるのです。

1 既に示したように、図に「愛」を加えなさい。

2 神の子として私たちが何かを「しなければならない」という事はだめだと説明して下さい。神は私たちが多くの事をするよう望んでおられます。関心ある親なら誰でも、自分の子が成長して良い者、誠実な者、尊敬すべき者、また一生懸命働く者となることを望んでいる、ということと同じようです。しかしたとえ私たちが何もしなくても、私たちはいまだ神の子であって、天国へ行きます。私たちの霊的誕生がそのことを永遠のものと定めています。懲罰があっても？そうです。実を結ばなくても？そうです。けれども、私たちは神に仕えなくてもよいのです。私たちの永遠の定めは自分たちのする、しないには依りません。

B さて聖書箇所を追加を始めて下さい。進むにつれて、それらを見たり、注釈して下さい。

1 ペテロ前4：8を加えて下さい。ここでは愛である「チャリティ」が「何事よりもまづ」であるべきであり、神の子らにおける他のすべての品性の特徴と「同じような」ではないことに注意して下さい。

2 コリント後5：14を加えて下さい。そこは愛が信徒の動機となるような（強いるような）力であることを示しています。

3 コリント前 13 : 1 - 3 を加えて下さい。あなたの生徒につき従い、これらの節を注意深く読むか、引用して下さい。それらは疑いもなく、神の奉仕で人が行なうすべての事が、愛に動機づけられていなければむなしいものである、という点を証しています。それは、もし私たちが愛の心から施すのでなければ、神は私たちのお金の施しにより誉れを受けられない、ということの意味します。それで施しは教会が求めているからとか、他人に感動を与えるからとかの理由でなすべきではないのです。私たちは自己の賜物で他人に感銘を与える為に賛美するのではありませんし、捕まるかもしれないから、盗みや姦淫を控えるのでもありません。私たちは子供が世話になっているから、あるいはすばらしい服をみせびらかしたいから、また可能な仕事上の接触を得たいから、教会に行くのではありません。

4 違うのです。私たちのするすべてのことは、神を愛しているからなのです。コリント前 10 : 31 を加え、それを読むか引用しなさい。救われた人が失せた罪人であった時点を回顧し、その救いの為にキリストにおいて支払われた代価を考えてみる時、きっと愛と感謝とがその心を満たすにちがいありません。私たちの為に多大なことをして下さった方の奉仕に、感謝の念から捧げること程高貴な特権は、他に決してありえないでしょう。

5 私たちが神を愛しているから、というだけの単一の心から神に仕えることは、大変実用的な真理です。私たちが神を愛し、神の望んでおられることだけをしようとする時、よいことだけをするのです。なぜなら、神は誰でも悪をなすことを決して望まれないからです。こうして愛から役割を果たす時、私たちは神を喜ばせるために正しいことをしていることに気づきます。雇い主を喜ばす為ではなく、法律のトラブルに手を出さない為でもなく、誰かに負うところがあるからでもありません。それは、雇い主がいて私達の肩ごしに見ている時良い仕事をするのと同様に、その雇い主がそばにいらなくても、私たちが良い仕事をする、ということの意味しているのです。それはまた私たちの隣人の家が、かぎをかけている時と同様、かぎをかけていなくても、私たちから安全である、ということの意味します。私たちは錠がなくとも、警備員がいなくても、決して物を盗んだりしません。それは私たちが決して見つからないとわかっている、自分の友に忠実であろうとすることを意味するの

です。私たちが神を愛し、神が私たちのうちに忠実さを望んでおられることを知っているからです。教師の皆様、あなたは心に浮かんでくる他のそうした類の考えを言うこともできます。ここでの主要な事柄は、あなたの生徒が愛とはなんと美しく実用的な動機であるかをわかるかどうか見ることです。私は世が決して愛の上に機能しないことを知っています。しかしもしそざるなら、私たちは軍事上の大きな防衛システムを決して必要なものとしなくなるでしょう。銃も警察も必要でなくなるでしょう。犯罪者の法廷も拘置所も刑務所も必要なくなるでしょう。もし神への愛が人類の単一の動機であるなら、人々は他人を損なうようなことはしないでしよう。さてそれはすべての人の動機ではありません。しかしあなたは自分の生徒に、愛が生徒の唯一の動機となり得るし、そうなるべきである、と教えることができます。

●あなたが去る時に。

1 あなたの生徒に、この時点で第五課を終えることを伝えて下さい。生徒にここまでいたる五つの授業のすべてにおいて、何の行動も要求されなかったことを指摘して下さい。これまでのすべてのことは、心の中でなされる決心に限定されてきました。あなたは生徒に祈りかたと、なぜそうすべきかを教えました、祈るよう要求しませんでしたし、バプテスマを受け、教会に加わること、あるいは他のなにかをすることも求めませんでした。生徒に次の授業は行動の授業となる事を伝えて下さい。あなたは神が生徒に神の子の一人として、積極的に何かをするよう望んでおられることを、説明し始めるのです。次週の授業の題は「神の諸教会の一つの部分として、神を礼拝し奉仕すること」です。あなたの生徒に、次週の授業はバプテスマを徹底的に説明することから始める、と伝えて下さい。それが何であり、なぜそれがでてくるべきか、です。

2 今度の日曜日に教会に来るよう、生徒を励ましなさい。

3 それから立って、次週も六つの授業シリーズを終える為、同じ時間にやってくることを保証して、玄関まで進みなさい。

14:11-12 ロマ2:2
ヨハネ17:17

神
サムエル前16:7

1 構成
2 預言
3 聖書の主張
ペテロ後1:21
テモテ後3:16
コリント前2:9-10

福音
ロマ1:16
コリント前15:1-4
1 死
2 埋葬
3 甦り

新生
ヨハネ3:1-14
ヨハネ第一5:1

信じる
使徒16:30-31
ヨハネ5:24
ヨハネ3:15-18

誕生

無関係

関係

- 1 失せた者
ルカ19:10
- 2 罪に定められる
ヨハネ3:18
- 3 罪の赦されていない
使徒13:38-39
- 4 不義
ロマ1:18
- 5 咎と罪とにて死にたる者
エペソ2:1
- 6 永遠の火の池
黙示録20:14-15

- 創3:21
- 創22:1-14
- 出12
- イザヤ53:7
- ヘブル9:12
- ヘブル10:1
- ガ3:24-26
- ヨハネ1:29
- 使徒8:32-35
- ペ前3:18
- ペ前2:24
- ロマ5:6-8
- ヘ10:10-14
- ヨハネ19:30

- 1 救われた者
エペソ2:8-9
- 2 義とされる
ロマ5:1
- 3 罪の赦された
エペソ1:7
- 4 義
ロマ3:22
- 5 永遠の生命
ヨハネ5:24
- 6 天国
ヨハネ14:1-3

100パーセントよいおこない

おこない

愛 バプテスマ 教会 礼拝 奉仕

交わり ●ヨハネ第一1
罪：イザヤ59:1-2
懲罰：ヘブル12:5-11
告白：ヨハネ第一1:9
ヘブル4:14-16

エペソ2:8-9
テトス3:5
イザヤ64:6
ロマ4:5

- 1 祈り
- 2 賛美
- 3 施し
- 4 宣教
- 5 主の晩餐

愛 バプテスマ

ペ前4:8 使2:41
コ後5:14 使16:33
コ前13:1
-3
コ前10:31

第五課の為の学習紙と授業計画

「交わりの基本と神と^{主題}共にあることの豊かな実」

一度人が救われたからには、神と交わりを^{共同}持ちながら歩くのがどんな事かを学ぶ必要があります。

関係と交わりを^{適用}区別し、あなたの生徒に、どうして交わりが失われ、また回復するかを教えなさい。それから生徒に、すべてのクリスチャンの奉仕の^{動機}を教えなさい。

暗記すべき聖書の諸節

ヨハネ第一書 1 : 7 「もし神の光のうちに在すごとく光のうちに歩まば、我ら互に交際を得、また其の子イエスの血、すべての罪より我らを潔む」

イザヤ 59 : 1 - 2 「エホバの手はみちかくして救ひえざるにあらず、その耳はにぶくして聞えざるにあらず。ただなんぢらの邪曲なる業、なんぢらとなんぢらの神との間をへだてたり。又なんぢらの罪その面をおほひて、聞えざらしめたり」

ヨハネ第一書 1 : 9 「もし己の罪を言ひあらはさば、神は眞実にして正しければ、我らの罪を赦し、凡ての不義より我らを潔め給はん」

ヘブル 4 : 14 - 16 「我等には、もろもろの天を通り給ひしおほいなる大祭司、神の子イエスあり。然れば我らが言ひあらはす信仰を堅く保つべし。我らの大祭司は我らの弱を思ひやること能はぬ者にあらず、罪を外にして凡ての事、われらと等しく試みられ給へり。この故に我らはあはれみを受けんが為、また機に合ふ助となる恵を得んがために、憚らずして恵の御座に来るべし」

コリント前 10 : 31 「さらば食ふにも飲むにも何事をなすにも、凡て神の栄光をあらはすやうにせよ」

概略

I 神との「交わり」は、神との「関係」よりも異なる領域を含みます。

A 「交わり」を説明しなさい。ヨハネ第一書1。

例。家族の対比の精巧さ。

B 神はその子らとの良き交わりを望んでおられます。ヨハネ第一書1：3，ヨハネ10：10，コロサイ2：6

C 悪いおこないは神との交わりに逆の影響を与えます。

1 罪は交わりを解消します。イザヤ59：1-2。

2 罪はすべての神の子らにとって現実です。ヨハネ第一書1：8-10。

過渡的な考え：罪は私たちが戦わねばならない現実です。

II 神は解消された交わりの回復の為に行動をとられます。

A 神はそれを懲罰をもってなされます。

1 ヘブル12：5-11。「糾弾する」「こらしめる」「鞭うつ」

2 すべての子らが懲罰を受けますが、それは常に、従おうとする者への矯正となります。

例。子と一緒に親。

B 交わりの解消した時すべきこと。

1 神へ告白する。ヨハネ第一書1：9。

2 神は赦され、弱さに打ち勝つ助けを与えられる。ヘブル4：14-16。

過渡的な考え：告白が交わりを回復させます。

III 神はその子らを動かすのに、たった一つの動機を望まれます。即ち愛です。

A 「しなければならない」ではなく、「したいから」という理由でしなさい。

B 愛を信徒の唯一の動機と教える聖書箇所。

1 ペテロ前4：8。「愛」を他のすべてのものの上に置くべきこと。

2 コリント後5：14。私たちの「強いられるような」力。

3 コリント前13：1-3。愛という動機がなければ、すべての努力は無価値。

4 コリント前10：31。すべてを神の栄光の為に。

5 大愛実用的な真理。

結論的な考え：これまで教えられた事は、あなたの生徒のどんな行動も要求されませんでした。次週の授業の主題は「神の諸教会の一つの部分として、神を礼拝し奉仕すること」です。それは神がその子らに望まれる多くの行動を説明します。それはバプテスマの徹底した説明で始まります。